



大震災からの復興をめざして

— 失くしたものと気づいたもの —

院長 沼尾利郎

この度の東日本大震災により被害を受けられた皆様に、心からお見舞い申し上げます。1日も早い復興と皆様のご健康をお祈りいたします。

今回の災害では当院も大きな被害を受けました。地震直後から停電・断水となり、使用不能となった5病棟あわせて200名以上の患者さん（入院患者全体の約3分の2）を屋外に誘導してから隣接する岡本特別支援学校の体育館に避難したり、院内の各病棟などに分散して移動しました。その後は壊れた箇所を修復して元の病棟に戻れるようになりましたが、1病棟だけは4月1日現在でも使用できずに患者の皆様にはご不便やご迷惑をおかけしています。これだけ大きな地震の中で患者さんや職員に直接的な被害がなかったことは、本当に不幸中の幸いであったと思います。病院機能の回復に伴って新規の患者さんにも対応可能となり、現在では福島県から17名の被災者を受け入れています。

この度の震災では職員の家族にも犠牲者が出たり実家が全壊するなど、多くの被害が出ました。日々明らかになる被害の甚大さには言葉もなく、大きな喪失感や深い無常観さえ感じます。しかし、私にはこの大災害を通じて気づいたものがあります。それは困難な状況下でも互いに支え合う現場スタッフの結束力であり、節度ある冷静な忍耐力です。「患者さんを守る」という強い使命感と懸命な自助努力の姿勢には、本当に頭が下がる思いでした。

この国にとっても当院にとっても、大震災の影響や被害の全貌は未だ明らかではありませんが、社会的連帯と相互扶助の下でこの試練を乗り越えていかなければなりません。

今は静かに犠牲者を悼（いた）み、被災者の無事を祈り、救援者に敬意を表します。